

報告書

海外教育
(特別)(実践)
研究 D 台湾

令和
3年度

上越教育大学

目 次

参加者および担当教員名簿、時間割……………1

参加学生の感想レポート……………2-9

記録写真……………10-13



☆R3年度 海外教育（特別）（実践）研究D「台湾」参加者名簿

No.	所属 1	所属 2	学籍番号	学年	氏 名	フリガナ
1	学部	共通	20212026H	1	榎森 脩斗	エノモリ シュウト
2	大学院	国際理解・日本語教育コース	20215453P	1	山田 結花里	ヤマダ ユカリ
3	大学院	発達・教育連携コース	20205804P	2	土屋 郁夫	ツチヤ イクオ
4	大学院	文理深化・英語コース	20205206H	2	石井 貴子	イシイ タカコ
5	大学院	国際理解・日本語教育コース	20215452J	1	福本 菜央	フクモト ナオ
6	大学院	文理深化・社会コース	20215258E	1	山田 圭祐	ヤマダ ケイスケ
7	大学院	芸能深化・保体コース	20205416P	2	飯田 雄輝	イイダ ユウキ
8	大学院	国際理解・日本語教育コース	20215451P	1	笠間 妙子	カサマ タエコ
9	担当教員	/			北條 礼子	ホウジョウ レイコ
10	担当教員				周東 和好	シュウトウ カズヨシ
11	担当教員				藤谷 元子	フジタニ モトコ

☆オンライン授業時間割

8:55～9:35	日本の文化（よさこいソーラン踊り）
9:35～10:15	リズム体操
10:25～11:05	リズム体操
11:20～12:00	日本の文化（百人一首）
12:10～12:50	日本の文化（百人一首）

感想レポート

海外教育研究レポート

B3 クラス

学籍番号 20212026H : 氏名 榎森脩斗

(本文)

台湾という日本とは異なる教育形態の中、現地の小学生を相手に日本文化について授業をすることを通して、台湾の小学生がどのような態度で授業に参加しているのか、現地の教員の方々はどのようにして児童に対し声かけをしているのかをオンラインという形ではあったが、観察することができた。また、授業を行うという過程において、日本の文化をどのように紹介するのか、どのような教材を使用すると興味を持って学んでもらえるのだろうか試行錯誤し授業を組み立てることの難しさや、教材研究の重要性など今後教員として指導する上で役立つ経験をするすることができた。

授業の内容は、日本のおもちゃについて紹介しようという方針となったが、コマや花札、百人一首など紹介したいと思うものが多く、何を中心に紹介するのか議論し、教材にかかる費用から百人一首か花札となり、ルールの単純さから百人一首を使った「ぼうずめくり」に決定した。今回の教育研究では、台湾の生徒ということで、日本語ではなく英語で行うこととなり、かつ、台湾の児童も母国語でない英語を使うためわかりやすい表現を使った英語という制約があり、パワーポイントやスクリプトの文面に苦戦した。しかし、その点については、藤谷先生から添削していただいたことで授業計画を練ることにより集中することができた。

入念に準備を行い、リハーサルではオンラインの接続関係やマイクのテストなどオンラインで起きうるトラブルに対してもある程度想定して設定したが、本番では、音が小さくて相手に届かなかったり、こちらの話す英語が児童に通じず、現地の教員の方が中国語で説明することになったり、トラブルが多く対応に苦戦することがあった。しかし、児童たちが「ぼうずめくり」を行なっている最中に飛び跳ねて喜びを表現したり、肩を落として悔しがっていたり「ぼうずめくり」を楽しんでいるようで、日本の文化に興味を持つきっかけを作ることができたと感じた。

今回の海外教育研究Dの台湾の小学生に対する授業を通して、児童や生徒が興味を示してくれるような教材を取り上げることが重要なことであるが、教材にかかる費用や時間配分にも気をつけなければならないという現実的な課題にも目を向ける必要性を経験することができた。また、オンラインで起きうるトラブルやオンラインによりどれほど活動が制限され、多くの考慮すべき点があるということを経験を通して学ぶことができる良い機会であった。さらに、教員側も児童側もお互いの母国語でない言語を使った授業は、グローバル社会における、日本語を母国語としない児童に対しての日本での授業という今後起こりうる教育的課題に通ずるものがあり、学生のうちに経験できたことはとても有意義な体験であったと思う。しかし、オンラインでの授業であったため、スクリプトなどを用意し、あらかじめ質問内容を知っていたためにある程度準備することができたが、伝わらないことがあったり、その場での英語の会話がままならないことがあったため、児童・生徒からのその場で浮かんだ疑問に対して、すぐに回答することができるように英語力を伸ばす必要があると感じた。

海外教育研究 D レポート

国際理解・日本語教育コース

20215453p 山田結花里

はじめに、本授業はオンラインでの開催ということもあり困難が多かったが、先方のご協力のおかげで、想像していたよりもはるかにスムーズに、そして子供たちが楽しそうにしている姿を見ることができてうれしく思った。我々の班は、題材として百人一首の坊主めくりを選んだ。その意図は3つある。1つ目は、取り札の中にある絵には十二単や狩衣、烏帽子といった日本独自の装束の絵があるため、日本的な雰囲気をはっきりと見て感じ取ってもらえるのではないかという点である。2つ目は、絵のある札だけを使い1枚ずつ取っていただくというシンプルなゲーム性であるため、比較的説明しやすく、遊ぶ際も簡単にできるため、時間制限がある中でやりやすいのではないかと思ったためである。3つ目は、戦略など何もいらぬ運任せのゲームであるため、ただやっているだけでも楽しめると思ったからである。以上の理由から坊主めくりを選択したが、懸念点もあった。それは「姫」「天皇」「貴族」といった概念をどう説明するのか、そしてシンプルなルールではあるものの、「このカードを引いたら何枚引く、あるいは捨てる」といった条件がすぐに伝わるかということである。

本番をやってみて、予想していたより子供たちがゲームに白熱してくれたことが非常に印象に残ったが、やはり上記の懸念点については課題が残ると感じた。本番は先方の先生方が英語で読み上げられたルールを翻訳して子供たちに伝えてくれたため、ゲームをスムーズに行うことができたが、英語で伝える授業という点を考えれば、先方の先生方の言語的なサポートがなければ成り立たないプログラムになってしまったのは、反省点として挙げられるのではないかと考えている。具体的な改善策としては、ゲームのルールのさらなる簡略化、動画を作成し、視覚的に理解してもらえぬものを作成することなどが考えられる。また、今回の活動を通して改めてチームで動くことの難しさ、それとは逆に心強さも感じることもできた。違う意見をすり合わせる作業は、妥協点をお互いにどこに見つけるかということが難しいと感じた。しかし、意見をまとめ、方向性が決まれば役割を分担し一人だけではできないものを作り上げることができたし、本番でも一人ではなくチームのメンバーと一緒にフォローし合いながら授業を行うことができたため心強い点だと感じた。

以上が、海外教育研究 D を通して学んだことである。今回の活動で得た教訓を、今後の教育実習など、様々な場面で活用したいと考えている。

海外教育実践研究 D (台湾) レポート

教職大学院 発達と教育連携領域

20205804P : 土屋郁夫

1. 海外教育実践研究の意味

私にとっての海外教育実践研究の意味をひとことで表せば、「世界を知る」またとないチャンスということになる。私は令和2年度に入学して、免Pの3年間で3カ所の海外現地実践研究を予定していた。しかし、新型コロナウイルスの影響で現地渡航がなくなり次年度に期待して令和2年度の受講をとりやめ、後期は大学院を休学した経緯がある。令和3年度も残念なことに現地渡航ができず、オンラインでの授業実践となった。

3月10日(木)実施のオンライン授業は、受講者8人が3チームで朝8時55分から12時50分まで5コマの授業を行った。教職員の皆様のご支援のもと、学生全員が真剣に取り組みハッピーな時を過ごせたと感じている。オンライン授業としての満足度は90%である。現地の音声が聞き取りにくかった点がマイナス10%である。

私は幼児から成人までの教育を研究しており、他国の教育との比較も重要だと考えている。他国を知るには現地を知ることが重要である。現地を知ることができなかった点でのマイナスは100%である。産業界では5ゲン主義という言葉で「現場、現物、現実、原理、原則」の大切さが強調されている。また、立命館アジア太平洋大学学長の出口治明氏が提唱する「人間が賢くなる方法は人・本・旅だ」という考えに私は共感している。以上、現地に行けなかったため研究授業としての私の満足度は50%と捉えている。

2. 受講開始から実践までの振り返り

今回の実践研究で行ったこと、心がけたこと、学んだこと、感じたことを記載する。

1) 行ったこと : 10月20日から3月10日まで、水曜日5限を基本に全員での情報共有・共同活動を行った。時間外の活動も各人で行った。順序としては、アイデア出し→チーム編成→授業案作成→授業案修正→リハーサル→本番授業という順序で活動を行った。

SNS(LINE)での情報交換も都度行った。例えば、台湾情報満載の冊子を取り寄せたとか、教材研究をしたとか、他の学校が台湾とオンライン授業を行ったとか、授業に関連する情報を共有した。

私のチームは3名であり、「おもちゃグループ」という別のLINEグループも作成して情報交換した。最初はおもちゃ・ゲーム・百人一首・花札などを紹介するアイデアを出し、狙いを絞って百人一首と花札を現地で紹介する授業案を作成した。ところが1月に渡航しないとの連絡を受け、オンラインで両方紹介するのは無理だと判断して、花札は取りやめとした。最後、百人一首だけの授業案を再作成し本番に臨んだ。

2) 心がけたこと : 準備期間中は小学校4年生向けの授業であることを常に意識して授業案作りを行った。本番では大きめの声でジェスチャーを交えて表現すること、ゆっくり話すことを心がけた。

3) 学んだこと : チーム活動によって自分にはないアイデアを取り入れた授業ができたのは良かった。台湾側がしっかり準備していたことも印象に残った。あらためて、事前準備の大切さを学んだと言える。

4) 感じたこと : 受講者全員が渡航を期待していたため、台湾に行けなかった無念さを抱えながらのオンライン授業だったと感じた。画面越しに見えた子どもたちの反応が良かっただけに、授業中も「行きたかったなあ〜」という受講者の声が絶えなかった。

授業を終えて、全員が学内のカフェで(ソーシャルディスタンスをとりつつ)想いを語ることで本当に良かった。現職の受講者の方とお話する最後の機会ともなった。

私は今後も海外教育実践の機会を逃すことなく、学友たちと授業作りを行っていきたい。

海外教育研究 D (台湾) レポート

英語コース

20205206H：石井貴子

今回、実際に現地に行き、授業を行うことは叶いませんでしたが、この講義全体を通して学んだことがたくさんあります海外とのオンライン授業をするという実践は私にとっても有意義な時間をもたらしました。

まず、この講義が不定期で行われるため、日にちや時間、段取りなど先生方や受講生のみなさんと調整していくのが、他の講義と全く違いました。さらに台湾に渡航し実際に授業ができるのかという不安が常にあり、昨年度のようなオンライン形式の計画も同時に考えなければならなりません。常に臨機応変に対応していくことが求められ大変勉強になりました。

チームで授業を作っていくことの面白さや難しさも体験できとても勉強になりました。実際に子どもたちが笑顔で活動してくれたことに達成感を感じました。

オンラインでの授業は、接続の問題が第一に難しいと思います。通信の状況を常に意識しながらの実践は、対面での授業よりもかなり気をつかいました実際途中で声が聞こえなくなり中断することになりました。それでも皆様の支えにより最後まで行えたことはとても嬉しかったです。また、英語での会話が伝え合えなかった時留学生に助けをもらい言葉が通じ合えるということはとても素晴らしいことだと実感しました。

画面越しではありますが、台湾の教室の様子や、子どもたちの身なりや態度、先生方の服装、先生方の子どもたちへの対応の仕方などがうかがうことができました。本当に実際に現地に行き、肌で感じたかったなと強く思います。

互いに母国語があり、英語を媒介(共通語)として行う授業実践は大変意義があることだと思いました。さらに互いの異なった文化を紹介し合うことは今後更なる国際社会に向けてとても大切なことだと思います。この講義をどうしても受講したかったのは、第一に現場で活かしたいと思ったからです。授業時に、海外で実際に生活して感じた経験を話すと、子どもたちは興味津々で聞こうとします。当たり前になっていることや生活様式、文化や考え方など「異なる」ことを理解し受け入れること、同時に自国の文化や言葉を考え直すきっかけになります。私自身それらを体験できたことがとても勉強になりました。今回、実際に現地に行くことは叶いませんでしたが、オンライン授業を通して交流することで、このことを現場で活かしたいとさらに強く思いました。

支えてくださいました研究連携課国際交流・地域連携チームの皆様や先生方、受講生のみんなに感謝いたします。ありがとうございました。

海外教育研究 感想

国際理解・日本語教育コース

20215452J：福本菜央

- プレゼン作成にあたって工夫したこと

私の班は「日本の祭り」について紹介することにしました。特に「よさこいソーラン」に焦点を当ててプレゼンを作成しました。はじめは台湾に行って対面で子どもたちとソーランを踊る予定でしたが、オンラインで行うこととなったため、オンラインならではの様々な工夫をして本番に臨みました。

まずは、手作り鳴子です。ペットボトルのキャップと牛乳パックで鳴子を作り、台湾へ送ることにしました。約 70 個の鳴子を一つ一つ丁寧に作り上げました。子どもたちが楽しそうに音を出している様子を想像しながら作るのが楽しかったです。また、飾り付けを台湾の子どもたちができるように、オンラインでの説明が簡単なシールを作成しました。台湾の小学校に、鳴子とシールとともに、法被を送りました。少しでもソーランの雰囲気を感じ取ってくれることを願って送ることにしました。

次に、ソーランの踊りの解説です。初めてソーランを踊る子どもたちにどのようにしたら伝わるかを試行錯誤しました。ほかの班のメンバーや先生方からアドバイスをいただき、ポイントに絞ること、踊りの見本を見せるときは背中側から映すこと、簡単な英語で伝えることを意識して練習しました。

オンラインのプレゼンを考えるのは初めてだったので、困ったことや迷ったこともありましたが、「子どもたちに楽しんでもらうにはどうするか」ということを一番に考え、子どもたちの楽しそうな顔や声を想像して作成することが大切だと感じました。

- 実際にプレゼンをした感想

はじめ、緊張や不安で押しつぶされそうでしたが、法被を着ている子どもたちの姿を見るだけで感動しました。今まで準備してきたことが実現していることに嬉しさを感じました。そして印象に残っているのは、鳴子を楽しそうに鳴らしている姿です。私の問いかけに対して、声ではなく鳴子を鳴らして返事してくれたことが予想外でした。自分で作ったものが海を渡って届き、それを使ってくれている様子を見られただけで、達成感を感じました。

プレゼンを全て英語でおこなってみて、自分の英語力がまだまだだということに気づかされました。オンラインということもあって、台湾側の英語が聞き取れないことや、自分が理解できていないことが想像よりもたくさんあったので、これからリスニング力やスピーキング力をつけていかないと感じました。しかし、何度も練習を繰り返してきたことが本番に繋がって、話す速さや強弱に気を付けながら子どもたちに伝えることができたと思います。

ソーランを最後にみんなで踊ったときに台湾の子どもたちと一緒に「どっこいしょ！」のかけ声をしました。声が揃ったときに、一体感と達成感で鳥肌が立ちました。この経験は私にとって忘れられないものになりました。今後海外の子どもたちとつながる機会があれば、今回学んだことや感じたことを活かし、自分のスキルアップも図り、さらに良いものにできるようにしたいと思います。

台湾との交流

学校教育深化・社会コース

20215258E：山田 圭祐

1 実践内容

私達のチームは、「スポーツリズムトレーニング」を題材に授業を計画した。「スポーツリズムトレーニング」とは、リズム感を高めることで運動機能を向上させるトレーニング法の一つである。¹今回は授業対象者が小学生ということで、この中の最もベーシックな、拍を取りやすい音楽に合わせて、床のラインを跨ぎながら前進するトレーニングを採用した。実際に行う種目は、3種目で「Hop forward (前進ジャンプ)」「Side-to-side Hops (サイドジャンプ)」「open-cross steps (クロスジャンプ)」を指導することにした。

2 準備

実際に対面で行うのか、オンラインで行うのか準備段階では分からなかったため、対面で行うつもりで準備を進めた。まずは、事前に子ども達がトレーニング可能かどうかを確認するため主な動きの動画を撮影し（この時は8種目を予定していた。）、台湾の先生が見られるような参考資料を作成した。また、全ての動きを英語で説明しなければならないので、生徒がわかりやすいような語句を考えながらセリフを作成した。我々教師の口頭の説明では理解できない生徒がいることを前提に、スライドを見れば何を説明しているのかを理解できるよう、スライドに動画を挿入したり、図を作成したりするなどの工夫をおこなった。

3 授業の実際

コロナ感染の関係で、授業はズームによるオンライン形式で行われることとなった。パワーポイントに使用する音楽や動画を埋め込み、できるだけタイムラグが生まれないように工夫して授業を修正した。また、生徒がズームの画面を見て理解しやすいような画角になるよう、カメラの配置を考えて動作を行なった。

二クラスの授業を行なったが、クラスによって子どもの反応が異なり、改めて授業においては学習集団に合った授業を行う必要があることを実感した。

4 感想

体を動かす授業をオンライン形式で行うという、生徒にとっては大変わかりづらい授業内容だったと思うが、現地の先生の協力や子ども達の素直な反応によってなんとか授業の形になった。また、台湾の子ども達の英語の理解力の高さに驚いた。恐らく日本の平均的な中学生よりもリスニング能力が高いように感じた。準備をしていただいた先生方や国際交流担当の方の助けがあって初めて形になった授業だと実感した。改めて感謝申し上げたい。

¹ 一般社団法人スポーツリズムトレーニング協会ホームページより筆者が抜粋
(<http://srt.or.jp/rhythmtraning/>：最終閲覧 2022年4月6日)

海外教育研究 D・台湾レポート

芸能深化/保健体育コース
20205416P : 飯田 雄輝

1. なぜこの授業を履修したのか

私は5年前から海外志向があり、いつか留学に行ってみたくて思っていました。上越教育大学大学院に入学してからたくさんの方々との出会い、お話を聞くなかで留学が身近なものに感じ、こんな自分でも留学にいけるかもしれないと思うようになりました。とは言え、英語が全く話せないためこの状態で留学に行っても何も得られないと思い、2年前から英会話教室に通うことにしました。人生初の英会話教室で初めは緊張していましたが、ネイティブの方々とお話することにも慣れてきました。英語を学ぶのはいいが、学んだことをアウトプットする機会が欲しいと思うようになりました。そんな時にこの「海外教育研究 D・台湾」の授業があることを知りました。

この授業は現地に行き台湾の小学生に日本の文化を教えることや、台湾の文化を学ぶことが狙いなので今の自分に必要な授業だなと思いました。ですが新型コロナウイルスの影響で現地に行くことはできませんでしたが、オンラインで開催することができました。また、留学先を台湾に決めていることから、今回の授業は留学前に経験しておくことが大切だと思ったのも履修を決めた理由の一つです。

2. この授業で学んだこと

今回の授業で学んだことは3つあります。1つ目は英語力の大切さです。2つ目は台湾の小学生の体育の実態です。3つ目は圧倒的な準備力です。

1つ目の英語力は昨年からの練習をして少しは上達してきているが、まだ実践的な英語力は身につけていないと強く実感しました。1対1でゆっくり話す分には整理しながら話せるが、授業や会話のテンポが早いとついていくことで精一杯でした。オンラインということもあり聞き取りにくいところがあるなかでリスニングの大切さを感じました。文法は多少間違えてもなんとか伝わるなど感じました。でも発音が悪いと中々伝わらないので発音の練習も同時に行う必要があると思いました。

2つ目の台湾の小学生の体育の実態については、日本の小学生よりも体力レベルは若干低いのかなと感じました。私たちの班はリズム運動を行ったのですが、同じ内容を日本の小学生に行ってもそこまで疲れている様子はありませんでした。オンラインで指示が伝わりきらなかった部分はありますが、台湾の小学生は疲れたと言っていたので運動量などは日本の方がいるのかなと授業をしながら感じていました。ただ、スポーツ自体はみんな好きで取り組んでいると言っていました。もっと日本の体育を教えてみたいと思いました。

3つ目は圧倒的な準備力です。毎回の授業でここまで準備することは難しいですが、本番1発勝負の時はどれだけ準備してきたかが大切になると感じました。私が唯一悔いが残っているのはセリフを覚えられなかったことです。台本を見ながら行ったのでスムーズに進まなかったことがとても悔しかったです。もっと発表練習をしていれば子供たちとコミュニケーションを取ることに意識がもてると思いました。自分のセリフで頭がいっぱいでした。

3. 今後の展望

今後の展望として、私は台湾へ留学に行くことが1番の希望です。現状渡航は難しいですが今回の交流を通して台湾の先生方の優しさや、暖かさをすごく感じました。また、台湾は野球も人気のあるスポーツなので野球指導も行ってみたくて思いました。

今回のこの経験は間違いなく自分の自信につながりました。少し前の私なら失敗する可能性があることは避けていましたが、今回やってみてなんだかんだできたなということがわかりました。先入観でできないと思うんじゃなくて、これからはやってみたくて思ったら挑戦していきたいです。

海外教育研究 D レポート

国際理解・日本語教育コース

20215451P：笠間妙子

○実施した交流授業

「スポーツリズムトレーニング」を行った。地面や床にひいたラインにそって移動しながら、軽快なリズム音楽に合わせてジャンプ運動をするトレーニングである。音楽を用いて楽しく身体を温めながらけがを予防し、身体パフォーマンスの向上を期待することができる。学校の体育であれば主に準備運動で取り入れることができる。日本ではプロスポーツや少年野球、部活動などでも取り入れられるところが増えてきている。

○工夫した点

授業を受ける小学生には、音楽に合わせて身体を動かしながら英語の指示を聞く、ということを目指すことになるので、特に英語の指示については、同じ表現を意図的に繰り返し使い、わかりやすく短いセンテンスで話すよう心がけた。簡単な言葉でも確実に伝わる英語表現は思いのほか難しかった。

交流授業を構想するにあたって、日ごろ疑問に思わなかったことに多く気づいた。台湾の小学校にはどんな体育の授業があるのか、体育館はあるのか、気候が違うことはどのくらい考慮すべきなのか等々、さまざまなことを考えたり調べたり、またチームメンバーと話し合ったりした。自分のもっている「当たり前」を問い直すよい機会となった。

○感想

当初コロナも落ち着いてきていたので、すっかり渡航するつもりでおり、交流授業の構想は対面で行うことを前提に考えていた。そのため、後から授業の構想を大きく見直す必要に迫られた。訪問すれば自分たちでできる事前準備も、すべて台湾の先生方をお願いしてご協力をいただいた。つたない英語での説明にもかかわらず、こちらの意図するところを理解してくださり感謝の念に堪えない。

オンラインでは、音と動きにどうしてもタイムラグが出るので、音楽に合わせての指示は難しかった。しかし、現時点でもこれだけのことができるとわかったことは大きな収穫だった。この点は、今後 5G 以上が普及していけばもっとストレスが少なくなるだろう。

小学生の皆さんがとても心待ちにしてくれて、たくさんの事前質問が寄せられたことに感動した。こちらから質問し、直接お話しする機会にも恵まれた。訪問がかなわなかったのは残念だったが、オンライン交流の機会が与えられたことを大変うれしく思っている。交流をサポートしてくださった研究連携課の皆さんに心からの感謝を申し上げる。

記録写真







